

学生歌

制定は大正12年4月。当時、予科3年生の浪江源治が作詞し、同期生の中村良之助が作曲して完成した。後年、浪江は「寒中、深夜まで下宿で布団にもぐり必死に歌詞を書いたものだ」と回想している。現在は通常、第2節までしか歌われていないが、漢籍の素養を垣間見る原詞は第5節まで存在する。

学生歌（原詞）

大豫三 浪江源治 作歌
同 中村良之助 作曲

〔一〕 御空に輝く陵爛の
北斗の星に憧憬れつ

久遠の理想を高く求め
辿る天路の草枕

行く若人の假寝にも
圓む夢の清き哉

〔二〕 紺碧深き海洋の
底ひに知れず秘められし

幾その寶搜すべく
腕鐵の丈夫が

丈餘の櫓權舵取りて
今し舟出の朝ほらけ

〔三〕 空に瞬く夕星の
さやけき光仰ぎみつ

いざ高誦さん精進の
自學の曲も朗かに

歌ふ歌人の胸底に
若き命の響あり

〔四〕 若き海士の背夕陽あび
月苦の上に傾きて

暮るればゆらぐ漁火の
友の燈と手を取りて

語り交しつすなどりの
今宵憇はん自治の島

〔五〕 瞬く星の啓示受け
囁く波の私語聞きて

青葉隠くる、丘の上の
自學と自治の學園に

灯す燈火の清ければ
千里の原に月淡し

千里山学報第九号・大正一二年五月二五日